



C24
佐澤 太郎 編纂
高等小學第一讀本
上卷

図書 和図書 遡
a 1 3 8 0 3 2 8 1 7 3 a
福岡教育大学蔵書

T1A3
10
Sa99k



佐澤太郎編纂

高等小學第一讀本

東京
文榮堂藏版

例言

一本書ハ、昨明治十九年出板ノ拙著尋常小學讀本ノ續キニシテ、高等小學讀書科ノ用ニ供セシガ爲メニ、編纂スルモノナリ、
一書中ノ文ヲ大別シ、漢文様ノ片假名交リ、尋常通用ノ片假名交リ并ニ平假名交リノ三體トシ、中ニ就キテモ、亦各稍其體裁ヲ異ニシ、且ツ送り假名ノ同ジカラザルモノアルハ、生徒ヲシテ、諸種ノ文體ニ慣レシメントスルニ在リ、
一歐羅巴亞米利加諸強國ノ略史ヲ掲ゲタルハ、

沿革ノ大略ヲ知ラシメントスルニ在リ、支那ハ古來吾ガ國ト關係最モ密ナルガ故ニ、殊ニ稍コレヲ詳ニセントシタレドモ、亦其大略ヲ示スニ過ギザルナリ、

一 高等小學ニハ、本邦歴史ノ科アルヲ以テ、本邦ノ略史ハ、コレヲ省キテ、單ニ尊王、愛國、義勇、廉恥ノ言行數項ヲ掲ゲタリ、

一 凡ソ外國ノ略史ヲ掲載スルニハ、只其國ノ沿革ヲ知ラシメントスルニ止マラズ、兼テ彼我ヲ對照シテ、本邦ハ皇統聯綿タル、世界無比ノ

貴キ國タルコトヲ了知シ、以テ尊王愛國ノ心ヲ喚起セシメントスルノ微意ナリ、

一 書中材料ノ理科ニ關スル事ハ、拙譯小學理科讀本ト重複スルモノヲ省キ、又同ジ事物ヲ掲グルニハ、故ヲニ、其説キ方ヲ異ニシタリ、然レドモ、同書ト對照スル時ハ、略理科ノ一斑ヲ見ルニ足ランカ、

一 虎ノ威ヲ假ル狐并ニ人間萬事塞翁ガ馬等ヲ掲ゲタルハ、本邦ニ言ヒ傳フル古事ノ、出所ヲ知ラシメントスルニ外ナラズ、

高等小學第一讀本
一本書ハ、專ラ文字ヲ讀ミ、文意ヲ解スルコトヲ
教フルヲ以テ目的トシ、諸種ノ學科ヲ授クル
ノ旨趣ニアラザレバ、汎ク諸種ノ材料ヲ採擇
セリト雖モ、畢竟生徒ヲシテ、厭フコトナカラ
シメント欲スルニ過ギザルナリ、
一一學期用ノ各卷ヲ分チテ、各上下二冊トセシ
ハ、購求者ノ便ニ供セントスルニ外ナラザル
ナリ、

編者識

高等小學第一讀本上卷

佐澤太郎 編纂

第一課

皇都

神武天皇、中原ヲ定ムルノ日、始メテ都ヲ大和橿
原ニ定メ給ヒ、其後、世々ノ天皇、都ヲ遷シ、舊都ノ
趾、諸國ニ多シ、仁德天皇ハ、攝津難波ニ都シ給ヒ、
桓武天皇ハ、都ヲ山城平安城ニ遷シ給ヒ、安徳天
皇ハ、攝津福原ニ遷リ給ヒシガ、幾クモナク復、平

安城ニ還リ給フ、平安城ハ京都ト稱ス、山嶽環繞、河水縈帶シテ、四時ノ景ニ富ミ、文人墨客ハ天下ノ勝地ト稱ス、神社佛閣、處々ニ峙チ、名所舊跡、頗ル多クシテ、遊歷ノ人、四時絶ユルコトナシ、人口凡ソ二十五萬餘、今上天皇、明治元年ニ至リ、都ヲ德川氏ノ舊府タル、武藏江戸ニ遷シ給ヒ、之ヲ東京ト改稱ス、

東京ハ、大日本帝國ノ首府ニシテ、東洋中ノ一大都會ナリ、土地廣濶ニシテ、東西三里、南北四里ニ涉リ、市内ヲ十五區ニ分チ、溝渠鐵道、縱横ニ通ジ、運輸ノ便利アリテ、車馬絡繹トシテ、絶エズ、商業最モ繁盛ニシテ、百貨輻湊ス、人口凡ソ百五十萬、

第二課

鳥獸

鳥獸ハ、動物ナリ、故ニ、音を聞くモノ、物を見るモノ、歩むモノ、已ガ儘ナリ、彼の猫を見よ、よく物哉見よ、音を聞き、食物を與ふニ喜ビ、之を食ひ、之を打てバ、痛を覺えて泣ク、これ猫ハ、生命あるガ故ナリ、

彼乃犬を見よ、それ主人を慕ひ、之ニ對して、其



親切あり、また鳥類ハ巢
を作りて、親切、其子を
育つ、彼の鶏を見よ、鶏ハ
よく其雛、心を用ふる
ものにあらばや、
鳥獸ハ、よく其子、心を
用ひ、且つ食物、好し惡
しを、知り分くるものな
り、
まゝしなごら、肝要なる

者の、足らざる所あり、即ち思慮のなき、是なり、但
別、自然知覺と云ふもれあり、故、鳥獸ハ、生命
あり、自然知覺ありて、自ら動くものなり、

第三課

小宮山友信

小宮山友信ハ、武田氏ノ臣ナリ、友信、屢勝頼ヲ諫
メテ、二嬖ヲ除カンコトヲ請フ、二嬖トハ、長坂頼
弘、跡部勝資ナリ、又小山將監ト、事ヲ争ヒ、相訴ス
將監、厚ク二嬖ニ結ズ、勝頼、遂ニ友信ヲ禁錮ス、勝
頼ハ、天目山ニ入ルニ迫ビ、友信、單騎難ニ赴キ、土

屋昌恒ニ謂ヒテ曰ク、君嘗テ吾ヲ擯ク、而シテ吾
今、君ノ難ニ赴クコレ、君ノ明ヲ傷ルナリ、然レド
モ、難ニ赴カザレバ、吾ガ義ヲ缺ク、我が義ヲ缺カ
ンヨリ、寧、君ノ明ヲ傷ランノミト、因リテ、賴弘何
處ニ在リ、ト問フ、昨日逃レタリ、ト答フ、又勝資將
監ヲ問フ、皆逃レテ、已ニ十日ナリ、ト答フ、友信曰
ク、吾、今日アルヲ、知ルコト久シト、潛然、相持チテ
泣ク、勝賴首ヲ俛レテ言ナシ、既ニシテ、敵兵至リ、
勝賴戰死シ、友信之ニ死ス、

第四課

衣服

衣服ノ、濕リタル時ハ、直チニ、之ヲ脱ギ、乾キタル
手巾ニテ、皮膚ヲ摩擦シ、其赤クナル後、他ノ衣服
ヲ、著換フベシ、若シ、著換ヘ難キ事アラバ、程ヨク、
運動シテ、其衣服ノ乾キテ、冷氣ヲ覺エザル様ニ、
體温ヲ保持スベシ、熱クシテ苦シキモ、衣服ノ濕
リタルマ、直ニ樹陰、又ハ風通ヨキ處ニ、息フハ、
甚ダヨロシカラズ、○厚衣ヲ薄衣ニ換フルハ、朝
ヲ最モヨシトス、朝ハ、元氣ノ極メテ強キ時ナレ
バナリ、又衣服ヲ換フルコトモ、食物ソノ他、種々

ノ習慣ヲ變フルト、同様ニテ頓ニ換フレバ、體ノ
強弱ニ從ヒテ、害アルモノナレバ、次第々々ニ、厚
服ヨリ薄衣ニ、移ルベシ、コレ至リテ重要ノコト
ナリ、左レバ、綿入レヨリ、袷ニ移リ、袷ヨリ單衣ニ
移ルヲ良トス、

第五課

老僧ノ接木

寛永の頃、徳川將軍、忍ぶ岡のあち、谷中れ里
は、鷹狩の時、同じ里の明し院真言寺へ、ふと立ち寄
られしに、年の頃八十は近き老僧、接木して居る

ふぞ、將軍は、笑ハセ賜ひ、如何は老僧、汝の年よ
て、斯る業せりとて、其甲斐もあるまじ、どの仰に、
老僧は、不興げある、顔色もて、おまは、我が身の爲
めは、あらば、此寺の行末を、思ふて、此業なり、と
ありけむ、實は尤れ事なり、など仰ある中、後
れたる御供の面々、此處は集里來し、る、老僧は、
初めて、貴人ある事、は心ざき、怖きて、奥へ遁げ入
りしを、召し出されて、物あま、賜はりつと、かん

第六課

石版繪

緻密ノ石灰石ヲヨク磨キテ平坦ニシ、圖畫ヲ石
面ニ畫ク、之ニ用フル筆ハ、脂油質物ト油煙ト、ノ
混和物ヲ以テ製ス、既ニ畫キ終レバ、黃蠟ヲ以テ、
石版ノ周邊ニ、小堤ヲ作リ、硝酸ヲ稀釋シテ、之ニ
注入ス、是ニ於キテ、筆ノ觸レザル處ハ、硝酸ノ爲
メニ溶解シ去リテ、微シク凹陷ス、乃チ、石版を淨
滌シテ、印行ノ墨汁を受ケ易カラシメテ、後先ヅ、
水ニ浸シタル海綿ヲ以テ、石版面ヲ濕シ、次ニ、墨
汁ヲ含メル圓棍ヲ圖上ニ回轉スレバ、筆痕ハ、凸
出セル處ニ、三、墨汁ヲ受ケ、凹處ハ、水濕ニテ、墨

汁ヲ受ケズ、之ニ紙葉ヲ載セテ、壓スレバ、圖畫ヲ
印シ得ベシ、然レドモ、石版ノ圖畫、右ニ向フ者ハ、
紙面ニ來テ、左ニ向フガ故ニ、初メ畫クニ當リテ、
欲スル所ノ方向并ニ左右ノ位置ヲ、相反セシメ、
文字モ、亦左書スルナリ、

第七課

温公破甕

昔、支那宋ノ司馬光ト云ヘル人、年七歳ノ時、數人
ノ兒童ト、共ニ庭前ニ遊ベリ、傍ニ大ナル甕アリ
テ、水之ニ滿チタリ、一人ノ兒童、其上ニ攀チ登リ



ケルガ、忽チ脚ヲ失ヒテ、
水中ニ陥リタリ、兒輩驚
キ遽テ、皆逃ゲ去リシ
ニ、光獨リ留リテ、少シモ
狼狽セズ、庭中ノ石ヲ取
リ、カヲ極メテ、甕ヲ撲チ
ケレバ、甕身破レテ、水迸
リ出デ、其兒爲メニ、死ヲ
免レタリ、光ノ朋友ト遊
ベル、危キヲ見テ、棄テザ

ルハ、義ナリ、石ヲ以テ、甕ヲ破ルハ、智ニシテ、且ツ
勇ナリ、竟ニ、其死ヲ救ヘルハ、仁ナリ、宜ナル哉、成
長スルニ及ビテ、其芳名、世ニ高く、遂ニ相位ニ登
リテ、温公ニ封ゼラル、光、常ニ人ニ語ゲテ、曰ク、我
一生ノ爲ス所、人ニ秘スベキ者ナシト、光ハ、誠實
ニシテ、内ニ省ルモ、疚キコト無キハ、此言ヲ以テ、
見ルベシ、

第八課

獨立

人ハ、稚き時よりして、自身の用丈ハ、成るべく、人

手を假らぬ様は、心掛くべし、先づ第一は、衣服の著様、食物は食ひ方を見覺えて、母や奴婢など、世話、或省くべし、諸又、逐々成長せど、自ら其身を養ふべき、覺悟ありたし、おれは、讀書算筆、言ふもさなり、家業を修め、商賣の道を習ひ、學問の時期を誤らぬ、おそ肝要なれ、若き時、再び來らば、老いて後、俄お見聞を博く、せんと思ふは、日暮れて、道を急ぐが如し、左りとて、老愚か、こゝなから、右の如くに、心掛きて、一人前乃人、とありたらん、は、怠りなく、其身を使ひて、活計を立つ

べし、左あづむ、世の中、人々、敬ひ尊まれんこと、疑ふべからば、然るに、人の勉強する、或見ふを、之、小倣はん、と、おせせど、父母より、賜はりたる五體や、天より、授りたる才智を、持ち腐せしめて、空しく、月日を送らむ、果ては、他人乃厄介、よかるより、外ふらふべし、斯くて、老人と生れたる、甲斐もなし、

第九課

交易

甲ハ、餘ノ梨子アレド、護謨球無ク、乙ハ、餘ノ護謨

高等學科 第一講
球アレド、梨子無クシテ、各其ナキモノヲ得ント
欲スル時、相談ノ上、餘ノ物ヲ交換スレバ、事足ラ
ン、之ト同ジ譯ニテ、農夫ハ、米、麥ヲ以テ、鋤、鋤ト交
換シ、靴工ハ、其靴ヲ以テ、米、麥ト交換シ、指物師ハ、
其製造品ヲ以テ、衣服ト交換スルナリ、此クノ如
クニ、其餘レルモノヲ以テ、ナキ所ノモノト交換
スルコトヲ、名ヅケテ、交易ト云フ、然ルニ、靴工ガ
米、麥ヲ欲スル時、農夫ノ欲スル所ハ、生憎、鋤、鋤ニ
シテ、相談調ハズ、因リテ、靴工ハ、先ヅ、靴ヲ鍛冶師
ノ鋤、鋤ト交換シ、之ヲ以テ、再ビ農夫ノ米、麥ニ交

換スルナド、隨分手數ヲ要ス、故ニ、日ヲ期シテ、市
ヲ爲シ、各人、其所有ノ品ヲ携ヘ來リテ、他ノ品ニ
交換スルナリ、然ルニ、尚不便ナルコトアリ、譬ヘ
バ、靴工ハ、一個ノ梨子ヲ要スルモ、一足ノ靴ヲ以
テ、之ニ交換セバ、損益償ヒ難シ、左レド、之ヲ寸斷
スル、譯ニハ行カズ、乃チ果物屋、先ヅ梨子ヲ靴工
ニ渡シ置キ、逐々渡シテ、靴一足ノ價ニ滿ツル迄、
貸賣ヲスルカ、又ハ靴工、先ヅ靴ヲ果物屋ニ渡シ
置キ、梨子ノ入用アル度毎ニ、之ヲ受取リテ、靴ノ
價ニ滿ルヲ待ツヨリ外、策ナカルベシ、

第十課

食用植物

植物ハ大ナルモノモ、小ナルモノモ、人ニ益セザル者甚ダ稀レニシテ、只其用途ニ異同アルノミ、人ノ食物ト爲ル植物ハ、オモナルモノハ、米、麥ナリ、米、麥ナドニハ、穂モアリ、緑色ノ莖モアリテ、其莖ハ、後ニ變リテ、藁ト爲ル、コレヲ總稱シテ、穀類トイフ。○其外ニ、野菜ト稱フル、一種ノ植物アリ、是モ、亦人ノ食物ト爲ル、但此類ハ、其種子ヲ食フベキ、ノミナラズ、葉ヲ食フベキ者アリ、萵苣、菠薐

草ノ類是ナリ、又幹ヲ食フベキ者アリ、土當歸、款冬ナドノ如シ、又根ヲ食フベキ者アリ、蘿蔔、蕪菁、胡蘿蔔ノ如シ、右ノ植物ハ、其食フベキ部分ニ違ヒコソアレ、何レモ、皆人ノ食フベキモノナリ、故ニ、之ヲ食用植物ト云フ

第十一課

絲車の發明

昔、英吉利ニハーグリーブスといふ人あり、其愛女ゼンニーハ、善キエ女なりし、其女の紡

言部 第一言部
きたる絲ハ類ふしとて人よもてはやさきたり
然るも家貧しけむをゼンニーハ少の錢を得る
が爲め朝より夕まで絲を紡ぎ時としてを深
更に至るおとそつあり父を少し錢乃爲め其
女のいたく身を勞るを見て吾若し彼れが爲
めよ自ら動く紡車を作りたらんハ斯くまで
苦勞ハさせまじきハといひつゝ此事をのこ
考へたりしを遂に之を作るの手段を發明した
りければ日夜忍耐して或ハ作り或ハ破り又作
りてハ直し種々又工夫して之を試みたるの末

終に紡車よ似たる一の器械を發明せりとぞ

第十二課

分業

凡ソ何レノ業ニ限ラズ久シク心カヲ一事ニ專
ラニスレバ才能自然ニ進ミ遂ニ熟練シテ成功
ヲ速ニスルハ人々ノ能ク知ル所ナリ分業ハ人
ヲシテ心カヲ一事ニ專ラナラシムルノ法ナリ
譬へバ爰ニ農夫大工左官石工鍛冶醫師等專業
ノモノアリ此等ノ人々始メヨリ互ニ相助クル
ノ念慮ナク各自カヲ以テ百般ノ諸物ヲ具へ諸

事ヲ辨ゼントセバ、生涯辛苦ストモ、遂ニ一物ヲ
モ造リ得ズ、一事ヲモ成シ得ザルベシ、試ニ其有
様ヲ想像センニ、住所ハ一茅屋ニ過ギズ、道路ハ
壅塞シ、器什ハ欠乏シテ、家事整ハズ、飲食備ハラ
ズ、智識ヲ研カントスルモ、其法ナク、其時ナカル
ベシ、

事業ハ大ナルモノニ至リテハ、既ニ分チタル各
分ニ就キテ、又再三之ヲ分ツベシ、此分チ方ハ、文
明ノ漸ク進ムニ從ヒテ、亦漸ク進ムナリ、

第十三課

虎ノ威ヲ假ル狐

昔、支那ノ宣王、一日、群臣ニ問ヒテ、曰ク、北方皆
昭奚恤ヲ畏ル、ト聞ク、信偽果シテ如何ニト、群臣
皆默ス、時ニ江乙ナルモノアリ、對テ曰ク、虎アリ、
百獸ヲ求メテ、コレヲ食フ、一日、狐ヲ得タリ、狐曰
ク、子ハ知ラズヤ、天帝曾テ我ヲ封ジテ、百獸ノ王
トス、今子若シ我ヲ食ハバ、恐クハ天帝ノ怒ヲ招
カン、子之ヲ信ゼズバ、我が後ニ隨ヒ來リ、百獸ノ
我ヲ見テ、走ルヤ否ヤヲ驗セヨト、虎首肯シテ、コ
レト共ニ行ク、向フ所、獸皆走ル、虎ハ獸ノ已ヲ畏



レテ走ルコトヲ知ラズ、
却リテ狐ヲ畏ル、モノ
トス、今王ノ地方五千里、
帶甲百万ニシテ、專ラコ
レヲ昭奚恤ニ屬ス、故ニ、
北方ノ昭奚恤ヲ畏ル、
ハ他ナシ、唯王ノ甲兵ヲ
畏ル、ノミ、コレ猶百獸
ノ虎ヲ畏ル、ガゴトシ
ト、

第十四課

乞食の名言

加賀の國は野田山とて、前田家先祖以來、代々の
墓所あり、其麓は家臣の墓も、多くあり、さ
れど、年毎の中元中元とは、陰曆の七月十五日をいふ。は、家々よ
り、墓前に燈籠を具ふ、身分重く、禄の多き人おそ
假屋を造り、衛士おど置きて、守りもすれど、其外
ハ、大のた、夜ふくれバ、ともしたるま、捨て歸る
もぞ、下部の惡黨ども來て、火を打著し、蠟燭を掠
め取るを、常とせ、或る時、側におををかぶりたる

乞食臥して居たるを、それを見て、人の先祖のためふとして、斯く墓を掘り、めける物をさやうに狼藉する事あるべし。と制しける。小惡黨ども罵て、おもをかふる身として、いらぬ事哉。いふ奴なり、といひし。ふその乞食をまゝて、各が今するやうなる事をせぬ故。おもをかふる、といひし。とぞ、誠に、おもしろく、言簡よて意足るといふべし。

第十五課

住居ノ選擇

住居ノ地ハ、空氣清潔ニシテ、ヨク日光ヲ受ケ、且ツ濕氣少キ所ヲ選ブベシ。北方ニ面スルコト勿レ、之ヲ忽ニスルハ、求メテ、日光ノ惠ヲ避クルガ如シ。正南ニ面スルハ、一舉兩全ニテ、夏日涼シク、冬日ハ温暖ナリ。

太陽ノ人身ヲ益スルハ、獨リ其温暖ニアラズ、光線ノ之ニ與フル利モ、亦少カラズ、人若シ陰地ニアリテ、日光ヲ受ケザレバ、假令ヒ滋養物ヲ食ヒ、他ノ攝生ヲ嚴ニ守ルモ、必ズ衰弱スルコト、猶草木ノ陰地ニ在ルガゴトシ、故ニ、住居ハ、光線ノ入

リ易カラシコトヲ計ルベシ、又大都ニ住スル者ハ、庭園樹木ノ近傍ヲ選ブヲ良トス、植物ハ、酸素ヲ吐キテ、雰圍氣ヲ清爽ニスルモノナリ、住居ハ、總テ墓地、屠獸場、穢肉、獸糞ノ貯蓄所及ビ止水、沼澤等ノ如クニ、有機體腐敗物ノ多キ土地ヲ避クベシ、田舎ニ於キテハ、糞坑或ハ家禽場等ヲ遠ザクベシ、

第十六課

紀ノ夏井

紀ノ夏井ハ、左京ノ人、美濃守從四位下紀善岑ノ

第三子ナリ、温雅ニシテ、才思アリ、承和ノ初メ、隸書ヲ善クスルヲ以テ、授文堂ニ待詔ス、文德天皇ノ時、右中辨ニ任ズ、夏井志ヲ秉ルコト、忠直ニシテ、時ニ規諫アリ、上コレヲ以テ、殊ニ之ヲ重ンジ、恩寵最モ渥シ、天安二年、天皇晏駕ス、夏井出デ、讃岐守ト爲ル、政化大ニ行ハレ、吏民之ニ安ンジテ、相欺クニ忍ビズ、任滿チテ、將ニ歸ラントス、百姓相率テ、闕ニ詣リ、乞テ之ヲ留ム、是ニ因リテ、更ニ留マルコト二年、去ル時ニ及ビテ、贈遺甚タ多シ、夏井一モ受クル所無シ、貞觀七年、肥後守ニ

拜ス、母石川氏之ヲ聞キテ、哭ス、人其故ヲ問フ、母答テ、曰ク、吾聞ク、肥後ノ風俗、國宰至清ナレバ、身必ズ全カラズト、我ガ子、ソレ終ヘザランカト、其廉直ナルコト、知ルベキナリ、

第十七課

老卒の犬

昔、佛朗西のナポレオン一世が、露西亞合戦此時、一老卒あり、犬を軍中ニ伴ひしに、半バ氷ニ覆ハれたる川を渡るとき、之を見失ひしは、軍中の人々ハ、皆溺れたるを、又ハ寒氣の爲め、死せる

からんといひあへり、去程ニ老卒ハ家ニ歸りし後も、已れと共に、恐しき合戦の艱苦を耐へし、其犬を思ひ出さること、屢かりしが、一年許此後、一日、瘦衰へて骨顯ハミ、毛ハ抜け果て、滿身穢かけある犬、其前ニ來て、匍匐ニあり、いとも悲げある聲、て、呻きたり、老卒、之を追へども、去るべき氣色かりしは、深く怪みて、よく之を見る、我ガ犬の如くかりしは、其名を呼びし、犬も俄ニ身拔起して、さも喜べるが如く、一聲高く吠へたるまゝ、疲れと飢と感動と、此爲め、弱りて

其處又倒れたり此犬ハ其主よめぐり遇はんの
爲め又記憶のみを便りとしてはるぐ露西亞よ
り歸りたるなりされバ其話ハ世よ名高くなり
いとぞ

第十八課

四時

一年ノ内ニハ晝長ク夜短ク晝夜共ニ甚ダ熱ク
草木ニハ綠色ノ葉茂リテ花ノ咲ク時アリ又晝
ハ甚ダ短クシテ夜ハ長ク草木ニハ大抵葉ナク
時候ハ寒ク風モ吹キ時トシテハ雪モ降り身體

冷ユルガ故ニ衣服ヲ重子火ヲ以テ體ヲ煖ムベ
キ時アリ其晝ノ極メテ長クシテ熱キ時候ハ夏
ニテ晝ノ極メテ短クシテ寒キ時候ハ冬ナリ
冬ノ次ニハ寒サ漸ク減リテ草木ニ葉ヲ生ジ櫻
ナドハ花モ咲キ鳥ハ巢ヲ作ルニ至ルコレ即チ
春ナリ

春去レバ夏來リ夏過グレバ漸ク涼シク爲リテ
日ハ短シ此時ハ柿大棗無花果ナドヲ取り稻ヲ
刈ル時候ニテ草木ノ葉ハ黃色ニ變リ風吹ケバ
次第ニ散ル之ヲ秋ト云フ秋漸ク去ラントスレ

高等小學科 第一課
バ、寒ク爲リ、人々火ヲ好ミ、雪モ降り、水モ凍ルハ、
復冬ノ來ルナリ、
春夏秋冬ヲ四時ト云フ、冬ハ寒ク、春ハ温ニ、夏ハ
熱ク、秋ハ涼シ、四時ノ一周ヲ一年ト云フ、今年去
レバ、來年來リ、來年去レバ、來々年來テ、其順環ニ
窮リナシ、

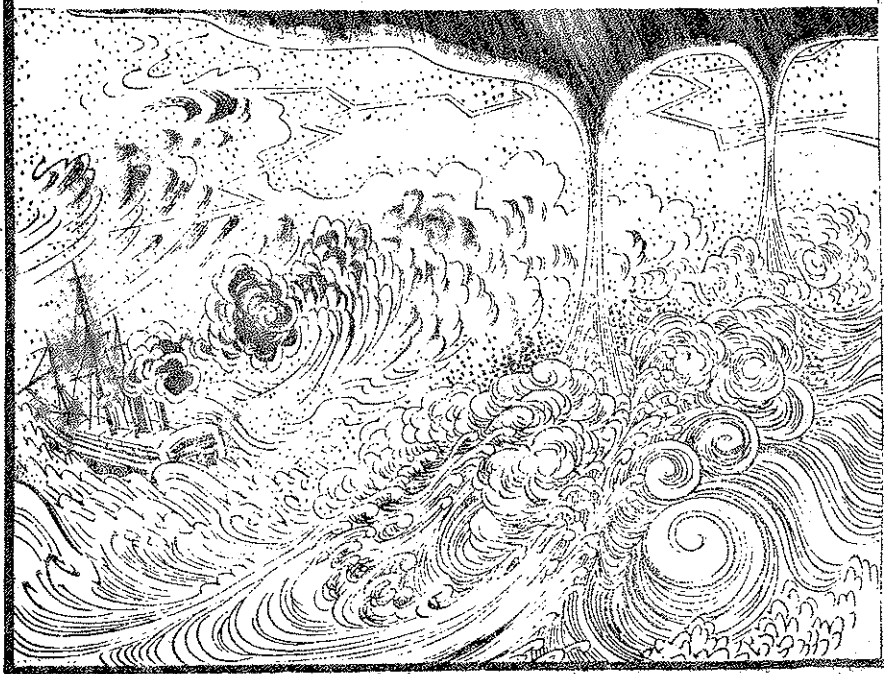
第十九課

龍騰

空氣大ニ流動シ、劇シク衝突シテ、甚シク暴掠ス
ルコト、往々コレアリ、之ヲ龍騰ト云フ、黒雲ノ如

クニ、路上ノ塵ヲ飄揚スル、彼ノ旋風ノ如キハ、龍
騰ノ小現象ナリ、電光雷鳴等ノ時、龍騰ヲ兼ヌル
コト、屢コレアリ、抑モ龍騰ニ、二種アリ、其陸上ニ
發ルモノヲ、燥龍騰ト云ヒ、海上ニ生ズルモノヲ、
水龍騰ト云フ、燥龍騰ハ、大樹ヲ拔キ、或ハ之ヲ拗
捩シ、時ニハ、地ニ漏斗形ノ深穴ヲ堀リ、或ハ瞬間
ニ、數十ノ家屋ヲ發キ、遠ク屋壁ヲ奪ヒ去ルコト
アリ、又水龍騰、一タビ海上ニ發レバ、海水爲メニ
飄騰シテ、高キ水柱ヲ成ス、其高サハ三十丈以上
ニ達シ、其頭ハ、雲中ニ隱匿シ、尾ハ展張シテ、海水

ニ連ル龍騰ハ、時ニ海面ヨリ昇騰シ、時ニハ雲間ヨリ下降ス、船舶不幸ニシテ、此災ニ逢ヘバ、忽チ飄騰シテ、再ビ海中ニ落ツ、航海者ハ、發砲シテ、空氣ヲ振搖シ、龍騰ヲ破碎シテ、四箇、或ハ五箇トシ、以テ其災ヲ免ル、コトアリト云フ、



第二十課

人間萬事塞翁が馬

むかし、支那北の胡れ、のほぼりの塞上ニ、一人の翁あり、此人、或る日、馬を失へり、人皆これをとふらぬ、翁曰く、おとも、亦さいえひたらざる事を志すんやと、月を経て、此馬をぐれたる馬、一匹をつれて歸る、人皆おきを祝ふ、翁曰く、これを亦禍たらざる事を志すんやと、かくて、其子、おの馬を愛し、朝も夕な、之を乗りて、樂みし、或る時、馬よりたち、其臂を折りて、翁が言は違はざりしや、

人、又是をとふらぬ、翁曰く、是も亦福とある事を
あらんやと、後一年むりして、秦の始皇帝、胡を
ふせがんがため、蒙恬を遣して、萬里に長城、拔
築らしむ、其時、生れつゝ健かる者ハ、皆公役、又苦
しめられて、死をるもの多かりし、たゞ翁父子
の、年老い、臂の折れたるが故、公役をゆるさ
れて、死を免れたりとや、おれ禍福のむかりが
たき事を謂ふなり、

第二十一課

過ヲ改メテ孝子トナル

昔、江戸小石川ノ人某、狂暴比ナシ、朋友之ヲ擯斥
シ、父モ、亦以テ子トセズ、隣ニ、一老儒アリ、恒ニ其
不孝ヲ詈ル、某一日、老儒ヲ問ヒ、禮ヲ厚クシテ、問
ヒ曰ク、惡人、一旦善ニ復レバ、宿惡悉ク消滅スカ
ト、老儒曰ク、善ヒカナ、問ヒヤ、一日過ヲ改メバ、斯
ニ善人ト爲リ、善人、一旦狂惑セバ、斯ニ惡人ト爲
ルト、某曰ク、吾、蠢愚ニシテ、親ニ順ナラズ、朋友ニ
悦ビラレズ、今ヤ翻然トシテ、過ヲ改メント欲ス
如何ニシテ、可ナランヤ、請フ教ヲ垂レヨト、老儒
曰ク、孝ハ百行ノ本ナリ、朝ニ省ミタニ定ムト云

フコトアリ、請フコレヨリ始メヨト、某拜謝シテ
還リ、乃チ親ニ事フルコト、一ニ其教ノ如クス、父
以爲ク、愚弄スル者ナラント、爲メニ怒リ、且ツ泣
キ、肯テ飲食セズ、婦人曰ク、昨日、彼レ儒家ニ往久
妾竊ニ之ニ跟キテ往キ、隙ニ就キテ窺フ所アリ
ト、乃チ詳ニ其見聞スル所ヲ語ル、父大ニ悦ビ、乃
チ爲メニ飲食ス、コレヨリ、父子相親ニ、遂ニ孝子
ノ名ヲ得タリト云フ、

第二十二課

貨幣

世ノ開ケザル間ハ、只物ヲ以テ物ニ換ヘシガ、職
業次第ニ分レ、交易漸ク盛ナルニ及ビ、隨ヒテ、現
物ヲ交換スルハ、不便ヲ覺フルニ至レリ、斯ニ於
キテカ、人トシテ、好マザルコトナキ者ヲ以テ、何
時ニ限ラズ、何品ニ依ラズ、何程ニテモ、各其必要
ナル物ニ、換ヘ得ベキモノヲ作りテ、交易ノ媒介
トス、之ヲ貨幣ト云フ、之ニハ、金銀銅ヲ用フ、殊ニ
金銀ヲ貴シトス、媒介ノ便利ナルコトハ、論ヲ待
タザレドモ、第一、其品位ヲ、他物ノ品位ニ比較シ
テ、何量ニ限ラズ、悉ク相當スルコトヲ得ベシ、第

二、他物ハ、大抵、年々産出多クシテ、世上ノ蓄積少シ、故ニ其位ニ昇降アリテ、一定セズ、金銀ハ、年々ノ産出少クシテ、世上ノ貯蓄多シ、故ニ其位ニ著シキ昇降ナシ、第三、市場ノ諸物ハ、多クハ、品位賤シク、金銀ハ、品位貴シ、第四、金銀ハ、其質最モ緻密ナルガ故ニ、摩滅セズ、又運搬シ易キノ便アリ、

第二十三課

黒田如水

昔日根野備中守といへる人、朝鮮へ使へ行きしが、家貧として、支度も心ままりせぬ、左邊バヤ

三好新左衛門をもて、黒田如水より、銀百枚をりける、歸朝の後、新左衛門と共に、如水の許へ行きて、一禮をいひし、如水、對面して、四方八方の話を中へ、人をよびて、さねふもらひし、鯛を三枚とお給して、其骨をあげ、今、吸物として出せといふを、兩人聞て、さても、吝嗇なる人かなと思ひしが、やがて酒をとりて、三好、銀を取出して返し、如水ハ、思ひけなき體にて、元と進上をるゝなりとて、手よだも取らば、再三、しひてかへせども、受取らざりしとぞ、飲食の事ハ、もらひし鯛を

も、みだりもちひび、あつても、客のまつて、いふ
まじき事とも思ひよらば、されど、朋友急用の爲
め、銀百枚をおしむべし、ともおもはば、是等
の事にて、其人の、儉素質直として、あつても、義を忘
れ、心事潔白なる事を志るべし、

高等小學第一讀本上卷終

明治二十年五月十三日版權免許
同年同月 日 出 版 定價金十壹錢

編纂者 佐 澤 太 郎
廣島縣士族 本郷區駒込西片町十番地

出版人 關 谷 末 松
茨城縣士族 神田區山本町二十五番地

發 兌 文 榮 堂
神田區山本町二十五番地

大賣捌 星 文 館
福岡縣福岡區下名島

